非農家の私と酪農

北海道帯広農業高等学校 酪農科学科　2年　砂川 律

「私は将来酪農家になります！」これは私が小学４年生の時の二分の一成人式で発表した言葉です。当時から自分に全く自信がない私が、唯一胸を張って今も声を大にして言うことができる言葉です。

小学４年生の頃、祖父母の影響を受けて少しだけ興味を持った酪農という職業に、非農家で農業とほとんど関わることのなかった私がこんなにものめり込み、高校生になっても酪農家になりたいと思い続けているなんて、何事にも飽き性だった当時の私は思ってもみなかったと思います。

そして、それまで住んでいた大阪府からも出て北海道の高校に進学し、家族とは離れて暮らしているなんて、今思えば「中学生の私は15歳ながらに勇気ある決断をしたな。」と、とても呑気な感想が出てきます。

８月のはじめ、校内を歩いている際に偶然学校見学に来ていた道外の中学生と出会いました。その子からは、緊張と、この学校に入学したいという情熱と、本当に入学できるのかといった不安、入学したらどんなことがあるのだろうというワクワクなど、様々な感情を見て取ることができました。

その子を見たとき私は「ああ、中学生の頃の私もこんな感じだったのかな。」と、とても懐かしい気持ちになりました。見知らぬ土地の学校で周りは知らない人ばかりという圧倒的な緊張と不安。学校見学に来ている生徒はみんな敵なのかもしれないという少しの恐怖。本当に入学できるのかという焦りと、入学したらどんなことが待ち受けているのだろうという期待。様々な気持ちが入り混じっていた記憶が呼び起こされました。

また、受験当日の面接は到底自分で納得のいく、満足のいくものではなく、面接終了直後、生徒玄関を出た瞬間にそれまで我慢していた涙が、入学できないかもしれないという大きな不安とともに溢れ出し、泣きながら父の待つ車に戻ったことを思い出しました。それは自分に自信が持てず、何事にも最初から諦めてしまいがちな私の人生で、初めて「絶対に負けたくない」と思った出来事だったと思います。

帯広農業高校の合格内定通知を、通っていた中学校で見た時の記憶はいまだに鮮明に覚えています。放課後、ほとんどの生徒が下校し、静かな職員室の前。封筒の中身を知らず、少し不安そうに私の顔を見ていた担任の先生。合格したことがわかると、自分のことのように喜んで、拍手をしてくださった先生方。「律！受かったんか！よかったなあ！」と少し荒っぽく、でも優しく頭を撫でてくださった体育の先生。その時には涙が溢れそうだったことを覚えています。私のそれまでの人生でこんなにも嬉しいことはありませんでした。

帯農に入学し、牛を自らの目で見ることで、食べ物の大切さや有難さを、とても感じることができました。また、酪農は自分の行動次第で、牛の健康状態を良くすることも悪くすることもでき、自分の生活も、良くも悪くも大きく変えることができることを知りました。そして、これらは酪農の大きな魅力だと感じました。

ですが、毎日の授業を受けていくうちに、周囲の友人たちと自分との圧倒的な差を感じるようになりました。それは、酪農についての知識量と将来の具体性についてです。知識量はまだしも「酪農家になりたい」と話す私と「実家の経営を引き継いで酪農家になって、今よりも更に規模拡大をしたい、六次産業を行いたい」と話す友人たちとでは、考える将来のゴールが全く違っていたのです。「酪農家になること」が目標の私と、酪農家になることは大前提で、そこから「規模拡大や六次産業化を行う」ことが目標の友人たち。私は友人たちと自分との決定的な差に、大きな焦りを持つようになりました。

「私は酪農家になって何がしたいんだろう」こんな言葉が頭をグルグルと回るようになりました。そんな時、帯農の女性の卒業生の方で、現在実家の酪農業を営んでいる方が講演会に来てくださり、酪農家になるまでどのようなことを行ったかについて、お話を聞く機会がありました。

その方は「大学在学中にいろいろな牧場を回って、大学卒業後は酪農の本場ヨーロッパで数年間研修を行いました。その牧場では生産した牛乳を使用したチーズを作って販売をしていました。」と話していました。跡継ぎは長男で、酪農は男社会というイメージが強くあった私は、女性の方がおひとりで酪農経営をされていることにとても衝撃を受けました。

その講演会がきっかけで「大学に進学し在学中に様々な牧場を回りたい。ヨーロッパで研修を行いたい。生産した牛乳でチーズを作りたい。」とぼんやりと考えるようになりました。

先日、私のそのぼんやりとした目標が、はっきりとした絶対的な目標に変化した出来事がありました。それはインターンシップで牧場実習をさせていただいた時のことです。

私が実習を行った牧場で、牧場主さんはこう話していました。「酪農家ごとに三者三様の考え方があるから、いろいろな牧場を回って、自分の考え方にあった酪農家に出会うべきだよ。遠慮することなく、やりたいことは声に出して行動に移しなさい。どれだけ経験がなくても、行動した人からチャンスは回ってくるんだから。」この言葉を聞いた時、私は絶対に達成したい目標ができました。

今、私には「酪農家になる」「大学在学中に様々な牧場を回る」「自分の考え方にあった酪農家に出会う」「大学卒業後はヨーロッパの牧場で研修を行う」「自分で生産した牛乳でチーズを作る」この５つの目標があります。新型コロナウイルスの影響で実現することが難しい目標や、長い期間を要する目標もあるかもしれません。ですが、幼い頃からの夢を現在も諦めていないように、これらの目標も諦めずに努力し、必ず達成したいと思います。

そして私の目標はこれからも変化し続けていきます。

幼い頃から「酪農家になりたい」そう言い続けてきました。馬鹿にされたこと、やめたほうがいいと言われたことは数え切れないほどあります。それでも、自分の幼い頃からの夢を叶えるために大阪府内を出て家族とは離れて暮らし、酪農について学ぶことを決意した中学生の自分を褒めてあげたいと、心から思います。

自分が非農家であることを恨んだことや、酪農家に生まれた子を羨ましく思ったこともあります。ですが、非農家に生まれたからこそ、酪農家にとって当たり前のことが全く当たり前ではない私だからこそ気づくことのできる、感じることのできる酪農の魅力が数多くあると思うのです。

非農家で酪農について学びたいと思っていても、関わることすらできなかった、かつての私のような人たちに、私の精一杯の気持ちが少しでも伝わればと思います。そして、少しでも夢に向かって一歩踏み出す勇気を与えることができたらなと思います。